

「2025 年度東アジアジュニアワークショップ参加報告書」

京都大学文学部 4 回生 夏木 馨

本プログラムは台湾で5日間にわたって開催され、ワークショップでは学生による発表・ディスカッションを行い、スタディツアーでは国立台湾大学の先生・生徒による企画のもと、台湾の歴史や現在を知るための様々な施設・団体を訪問しました。

初日の夜に台湾に到着して歓迎の夕食会に参加したのち、まず大学でのワークショップがあり、2日間朝から夕方までセミナールームで過ごしました。発表のテーマは各国の文化・政治韓国・日本・台湾それぞれの視点から生まれた異なる研究はどれも興味深く学ぶことばかりで、それぞれの立場から意見を交換し合ったディスカッションもとても深いものになりました。英語での個人プレゼンテーション（15分）を行うことについて不安もありましたが、7月から8月にかけて発表内容や構成についてアドバイスをもらう機会が複数回あったことが非常に役立ちました。私は3回生の実習で調査したフィリピン人結婚移民女性の生活史と老後の居住地選択課題について発表しましたが、先生からフィードバックやアドバイスをもらうなかで当時は気付かなかった「親密性の労働」「ケアダイヤモンド」といったスコープを新たに用いて分析をすることになり、学びを深めることができました。準備は大変でしたが、発表や質疑応答、他学生の発表を聴くことを通してアカデミックな点において大きく成長できたように感じます。私が英語で発表する機会をもったのは本プログラムが2回目でしたが、1回目も文学部によってハイデルベルク・ストラスブールに派遣された時だったことを振り返ると、国際交流室のプログラムに貴重な学習の機会を頂いてきたことに改めて感謝の念を抱いています。

後半の2日間では、立法院、国立博物館、二・二八和平公園や龍山寺などの台北の歴史・政治において重要な場所を見学したほか、ホームレス支援団体やLGBTQホットライン機関を訪ねました。私はかつて戦後加害責任について考える自主ゼミに参加していましたが、国立台湾博物館で日本統治下ガイドによる詳細な解説を聞いた時は、これまで机上の概念であった植民地主義や帝国主義について、自分はどうのように向き合えるか知識と責任を持って考え続けるべきだと再感しました。

プログラムで最も印象的だったのは、やはり韓国・台湾の学生との交流です。台湾の学生に関しては、ワークショップやスタディツアーを通して彼らの民主主義や平等に対する強い意識と誇りを感じただけでなく、同じ社会学専修の学生として、台大社会学の学生の優秀さと社会課題に対する熱心さには非常に大きな刺激を受けました。訪問先でゲストスピーカーとなった方には台大社会学出身の方が何人もいて、京大の社会学にもこのような卒業生との繋がりや、彼らの話を聞く機会があれば良いと思いました。韓国の学生に関しては、英語が堪能な学生が多くその点で刺激も受けましたが、国を超えて同じ問題に関心を持つ仲間と出会い、フェミニズムを学ぶ学生と日韓のアンチフェミニズムに

ついて議論できたことが印象に残っています。

プログラムの最後に、台大の Wu 先生から「ここにいる異なる私たちが力を合わせることでよりよい社会に向かって行ける」という趣旨の話がありましたが、その中の”Together, Stronger” というフレーズはまさに本プログラムから私が得た視点を言い表しています。台湾・韓国の学生と共に学ぶことは初めてでしたが、近い文化・歴史をもつからこそ共有する問題がある一方で、相違点からは互いの国を比較することができ、学生や先生との議論・交流のなかで日本を東アジア地域のなかで捉え直すことができました。進路への大きな影響はまだ分かりませんが、今後自分が社会に出ていくときに、常に国際社会における東アジアの位置付けやその特徴について見識のある人間でいたいという、責任感に近い意識をもちました。

最後に、プログラムを通して私たちを様々なサポートしてくださった先生方と職員方に感謝申し上げます。